

看護学生の自我状態と基本的構えよりみた 態度育成の教育

川崎医療短期大学 第一看護科

太 湯 好 子 塚 原 貴 子 谷 原 政 江
中 西 啓 子 杉 田 明 子 渡 邊 ふみ子

(昭和62年8月21日受理)

An Education for the Student Nurses Behavior to be Expected from the Point of Egograms and OK positions

Yoshiko FUTOUYU, Takako TSUKAHARA, Masae TANIHARA
keiko NAKANISHI, Akiko SUGITA and Fumiko WATANABE

*Department of Nursing Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki 701-01, Japan*

(Received on Aug. 21, 1987)

Key words: 交流分析, 看護学生, 自我状態, 基本的構え

概 要

ナースとしての望ましい態度育成のためには、情意領域の教育は重要である。今回、交流分析の考えをもとに情意領域の教育の工夫を考えるうえの一方法として、TOAKを用いて看護学生を対象に、自我状態(エゴグラム)と基本的な対人態度(OKグラム)について調査をし、特徴を分析した。また、4つの基本的な構え別に対象を分け、各類型とエゴグラムとの関連およびYG性格検査との関連の分析を試みた。

はじめに

看護教育にたずさわる私達は、どのような資質を望ましいナース像のなかに求めているのであろうか。

望ましいナース像とはどのようなものかと問われたとき、ある者は優しさをあげ、ある者はてきぱきと仕事を処理していく能力をあげる。しかし、どのような人がナースであって欲しいかと問われたときには、患者に安心感を与える優しさや、包容力があり、急変した状態にも冷静に判断ができる能力を持つ人が是非とも必要であると答えるように思う。日本の看護学生を対象に調査した理想的ナースの資質としてあげ

られた性格には、学生達は優しさと機敏さを上位にあげている。¹⁾

看護教育の対象は子供から大人への過渡期といわれる青年期であり、人間としても成長、発達の過程にある学生である。この点、個々の学生にあわせた教育、指導もそれだけに複雑で多様であるといえる。

今回、交流分析(以下TAと略す)の考えをもとにTOAKを用いて、本学看護科学生の人間関係のなかで自我状態と基本的な対人態度についての現状をとらえた。そして、望ましいナースとしての自我構造や、基本的な態度を育成する教育の可能性について考察を加えたので報告する。

1. 研究方法

1) 1986年9月に川崎医療短期大学看護科の全学生、第一看護科：3年課程 158人、第二看護科：2年課程 113人、(回収率は100%)を対象に自我状態(エゴグラム)と基本的な構え(OKグラム)を調査した。

2) 対象をOKグラムの4つの基本的構えの型別に分け、各群とエゴグラムとの関連をみた。また、4つの基本的構えの型とYG性格検査の各類型との関連を分析することにより、看護科学生の対人的傾向を調べた。なお、YG性格検査は入学試験の時に調査した結果を用いた。

2. TAでいう自我状態と基本的構え

人間は誰でも、自分の心の中に3つの心、あるいは3つの心理的現実をもっている。その3つの自我状態をTAでは「親の自我状態」(Parent)「成人の自我状態」(Adult)「子供の自我状態」(Child)に分けた。(Erick Berne)そして、人間の心のなかを客観的に知る方法として、エゴグラム(Egogram)が開発された。(John. M. Dusay) TAでいう3つの心とは精神分析では「超自我」「自我」「イド」の概念に相当する。

J. M. Dusay は、エゴグラムは「心理的な指紋のようなものであり、我々のなかの自我状態(親の自我=P 成人の自我=A 子供の自我=C)に注がれる〈心理エネルギー〉の量を目に見える形で表現したものである²⁾と述べてい

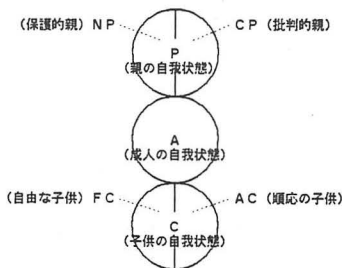


図1 5つの自我状態と機能

る。P A Cは図1の如く、機能的に5つの自我状態に分けられ、この5つの自我状態で示したものがエゴグラムである。エゴグラムは直接的な「今、ここ」の社会的レベルにおいて現れ、かつ体験されるパーソナリティーの肖像画であるともいう。それは、親や親以外の影響者からくる人生早期の「プログラム」を個人が受け入れることに端を発し、今では、脚本(基本的な信頼感の歪みとその後の人生体験との関連)の母型で見られるように内在化されているのである。³⁾人生に対する基本的な構えは、最初に出会う母親の影響に始まり、その個人と周囲の人々との関係のなかで、「三つ子の魂百までも」として形成され、固定してゆくのである。その後、何らかの新たな学習体験によって修正が行われないかぎり、これらの基本的な構えは一生の行動パターンに大きな影響をもつ⁴⁾といわれる。人生脚本の形成は図2に示す如くである。

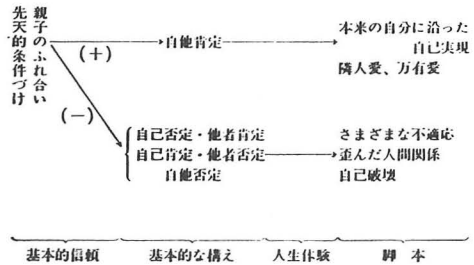


図2 人生脚本の形成

(池見西次郎・杉田峰康著「セルフ・コントロール」p71より抜粋)

質問紙法TOAKは5つの自我状態を示すエゴグラム(パーソナリティーの5つの基本的構成要素)と、人間関係における基本的な構え(OK Positions)をあわせて、その人の人間関係のなかでの自我のあり方をとらえることが目的である。

3. 結果および考察

1) 本学看護科学生のエゴグラムとOKグラム
図3は、第一看護科学生のエゴグラム(上部は自我状態を示すエゴグラム、下部は基本的

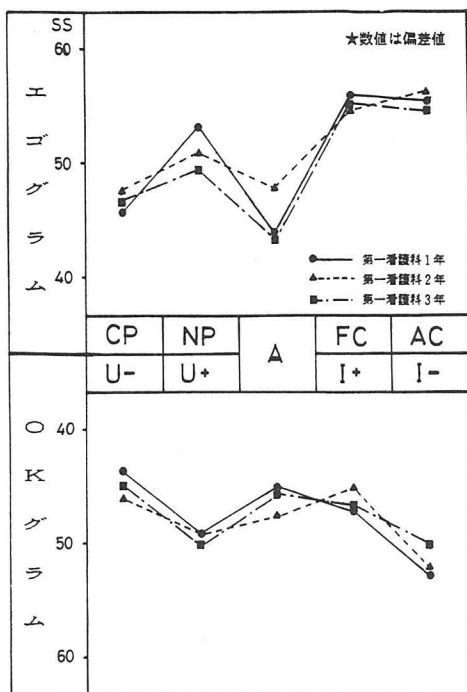


図3 OKエゴグラム(第一看護科)

(Uは他者 Iは自己 +は肯定 -は否定を示す)

な構えを示すOK Positionsを示したOKグラム)であり、エゴグラムを数値で示したのが、表1である。(CP) (NP) (A) (FC) (AC)とも

表1 エゴグラム(第一看護科)

学年	平均値 標準偏差	型				
		CP	NP	A	FC	AC
1学年	平均値	45.86	53.09	43.89	55.43	55.43
	標準偏差	8.70	7.14	10.20	6.45	9.29
2学年	平均値	47.62	50.73	47.64	54.75	55.64
	標準偏差	10.98	9.36	10.20	6.45	7.66
3学年	平均値	46.68	49.68	43.38	54.98	54.49
	標準偏差	7.73	8.05	9.53	6.27	8.13

に、各学年間では有意差は認められず似かよったエゴグラムを示しているといえる。

最も高い自我状態は1学年と3学年が(FC)、次いで(AC) (NP)となり、2学年では最も高いのが(AC)で、次いで(FC) (NP) (CP)となり、全学年とも最も低い傾向を示すのが(A)である。親の自我状態(P)と成人の自我状態(A)に比べ、(FC) (AC)という子供の自我状態(C)が高い。

思春期のエゴグラムは男女の別なくエネルギー配分において(C)主導型であるといわれている。⁵⁾この点、看護科学生のエゴグラムは思春期のエゴグラム像に近いといえる。また、エゴグラムの型全体よりみると、(C)にエネルギーの配分が傾き、(AC)が高い傾向であるが、(A)の低いN型ともM型ともはっきりと言にくいエゴグラムを示す。N型はDusayの分類によると、「やさしいサリー」(寛容すぎる女性)に似ており、他人から利用されることが多く、要求されたこと以上に尽くし、“No”と言うのが困難な人である。⁶⁾また、M型は成人女性の健常者のエゴグラムである。これらよりみると第一看護科学生のエゴグラムは(AC)が高く、消極的で従順な面をもつと同時に(FC)も高いため、自分の思い通りに動きたいという甘えの強さも示している。子供から大人にかけて、最も位置の変化の大きい自我状態は(C)である⁷⁾という。看護科の学生の場合も、まだ(C)の自我機能に変化を示している時期といえる。

さらにOKグラムをみると、自己否定の傾向が最も強いことがわかる。この年代の学生達は、(C)の意味づけがはっきりと分化し、(FC)は自己受容の意味、(AC)は自己拒否の意味を持つ。(FC)が強いと自己受容しやすく、良い子で自分をおさえ、他者に遠慮する。(AC)が強いと、自己受容しにくい傾向がみられる⁸⁾といわれる。看護科学生の場合も(AC)が高いことが自己否定と結びついているといえる。次に高いのが他者肯定であり、これは(NP)の高さと関連がある。看護学校受験者の(NP)は自己受容、他者受容の両面に同じくらいの強さで結びついており、(NP)が看護婦を職業選択しようとする者には重要な意味を持っていることを示唆しているとの報告がある。⁹⁾また、(NP)は母性性を形成する条件のかなりの部分を占める。¹⁰⁾との報告からも看護科の学生にとっては、(NP)は他者肯定、自己受容の面からも重要な要素になることがうなずける。

図4は、第二看護科のOKエゴグラムである。第一看護科と第二看護科のエゴグラムを比較しても、(CP) (NP) (A) (FC) (AC)とも、ほぼ同じ傾向のエゴグラムを示しており、有意差は

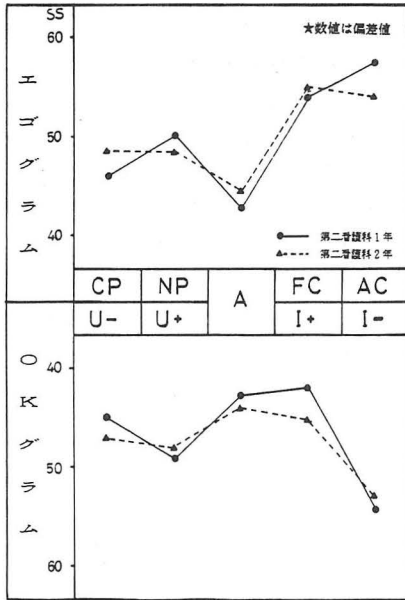


図4 OKエゴグラム(第二看護科)

みられなかった。エゴグラムの型としては、1学年はAを底とするN型を示し、2学年はM型に近い。OKグラムをみると、第一看護科と同様に自己否定が強い。看護科の学生の共通点として、Aが最も低く、P<C NP>CPで、FC ACがともに高いエゴグラムをもち、自己肯定<自己否定、他者肯定>他者否定で自己と他者への関心の度合いからすれば、自己>他者の傾向をもつ。

2) ピークエゴグラム

ピークエゴグラムとは5つの自我状態のなか

表2 ピーク・エゴグラム

科・学年		型	CP	NP	A	FC	AC
第一看護科	1 学年		5.4	17.9	8.9	30.4	37.5
	2 学年		14.5	3.6	10.9	29.1	41.8
	3 学年		8.5	6.4	2.1	42.6	40.4
	平均		9.5	9.5	7.6	33.5	39.9
第二看護科	1 学年		6.8	8.5	5.1	28.8	50.8
	2 学年		7.4	20.4	11.1	35.2	25.9
	平均		7.1	14.2	8.0	31.9	38.9

で、どの自我状態が最も高い値を示したかをいう。このピークエゴグラムの出現率を学年別にまとめたのが、表2である。各学年間では有意差はみられなかった。

第一看護科と第二看護科別にみると、第一看護科ではAC39.9%、FC33.5%、ACとFCを合わせると73.4%である。

第二看護科においても、AC38.9%、FC31.9%とCの自我状態の占める割合は70.8%と高く、第一看護科、第二看護科ともにCの自我状態に集中する割合が高い。

TAでは、人間はエゴグラムのなかの最も高いエネルギー、すなわち一番強い自我状態で反応する傾向が強く、その人の行動の最もめだつ特徴を作り出すという。¹¹⁾ この点、看護科学生はCの自我状態で反応する度合いが高いといえる。

成人女子ではNPが高く、同時にCPの形成もみられ、子供の自我状態より親的自我状態としてのエネルギーが高くなる。¹²⁾ という。看護科学生の自我状態は、ピークエゴグラムをみても成人の女子の自我状態への移行段階にあるといえる。

3) 4つの基本的構え(OKグラム)の型判定

OKグラムの型判定は人間の基本的な構えをみるうえで重要である。第一看護科、第二看護科別にどのくらいの割合で自他肯定型(++)、自己肯定・他者肯否型(+-)、自己否定・他者肯定型(-+)、自他否定型(--)が出現する

表3 OKグラム型判定

科	型	%			
		自他肯定型 (++)	自己肯定・ 他者肯否型 (+-)	自己否定・ 他者肯定型 (-+)	自他否定型 (--)
第一看護科		30.4	8.9	34.2	26.6
第二看護科		25.7	8.8	31.9	33.6
看護科(第一看護科・第二看護科)		28.4	8.9	33.2	29.5

かをみたのが、表3である。(以下(++)、(+-)、(-+)、(--)の記号に略す)。

各学年間および第一看護科、第二看護科の間

には有意差はみられなかった。TAでは対人関係の基礎になる自分自身と他者との受けとめ方を対人関係の基本的構えととらえている。基本的構えは行動の基礎になる対人態度で、それが実際にあらわれたのが自我状態なのである。

基本的構えの(++)の学生の割合は全体の約3割で、他の人との関係で自我状態のマイナス面が表われやすいといわれる他者否定傾向が強い学生(--)、(+-)がそのうち約4割近くを占めている。これらよりみると、看護婦をめざす学生の場合、最低限、他者信頼(他者肯定)が培われることが必要になる。

人はCの段階で親たちからCらしい扱いを受けて、初めてAの段階へと進むことができ、そこでAらしい扱いを体験できたときのみPへと発達するものと考えられる。¹³⁾ 他者との関係とのなかで歪みが生じた学生の場合も、Cのエネルギーを十分に受けとめてもらい、初めてAやPの自我状態が育つものとする。このためには、温かい人間的な配慮が教師に要求され、それなくしてはナースとして、最低限必要な他者信頼は生まれえないといえる。

4) 4つの基本的構え(OKグラム)とYG性格検査の各類型との関連

図5、6はOKグラムの型別と、YG性格検査の各類型との関連を第一看護科、第二看護科別にグラフに示したものである。基本的構えのどの型をみても、YG性格検査のD類型(安定、積極傾向)の割合は高い。そのなかでも、(+++)の学生はD類型にでる傾向が高く、次いで(+-)の学生もD類型にでる傾向が高い。このことより、基本的構えが自己肯定で自分に自信のあるタイプの方がYG性格検査では、Dタイプにでる頻度が高く、(+-)、(--)すなわち、自己否定で自分に自信のないタイプはD類型にでる確率は、自己肯定の学生より低く、どの類型にも分散する傾向がみられる。積極、消極を問わず、不適応の類型(B、E類型)を示す割合は、(--)のタイプの学生は(+++)タイプの学生に比べて高いことがわかる。

OKグラムとYG性格検査との関係の検討のなかで、水野等¹⁴⁾は、自己肯定型(+++)はYG類型のD類型(安定、積極傾向)に近く、情緒安定、

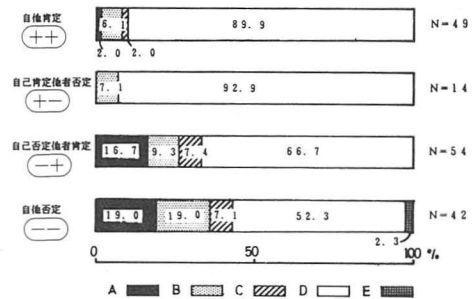


図5 OKグラムの型別YG性格検査の類型(第一看護科)

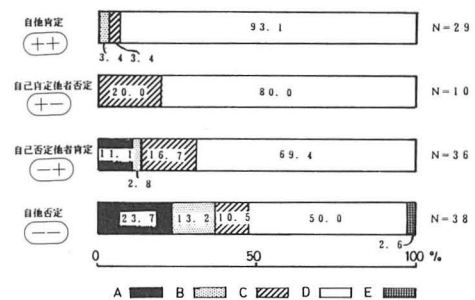


図6 OKグラムの型別YG性格検査の類型(第二看護科)

社会適応、活動的、外向的で性格も良い面が表にでやすく、対人関係もうまくゆきやすい。自己否定型(--)は、YG類型上のE類(不安定、不適応、消極傾向)に近く、情緒的な問題のために不適応をおこしやすい傾向があり、(+-)、(-+)の型はYG類型上では、はっきりした傾向がみとめられれないと述べている。

看護科学生の場合には(+++)が9割近い頻度でD類型に出現している。しかし、(--)の学生の場合にも5割近い頻度でD類型の出現がみられる。

(--)の学生のうち、E類型の出現頻度は第一看護科2.3%(1人)。第二看護科2.6%(1人)であり、(--)の学生からのみE類型の出現がみられる。

5) 4つの基本的構え(OKグラム)の型とエゴグラムとの関連

図7、図8は、OKグラム(+++、+-、-+、--)の型別に、それぞれのエゴグラムを

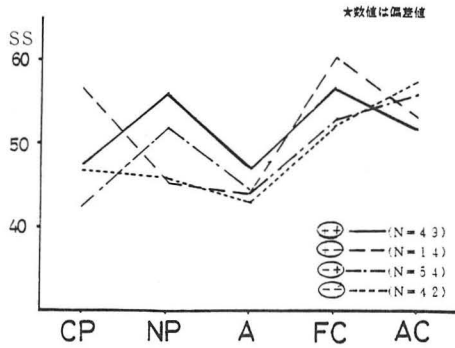


図7 OKグラムの型別エゴグラム
(第一看護科)

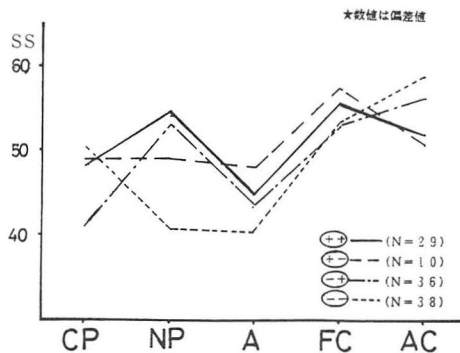


図8 OKグラムの型別エゴグラム
(第二看護科)

描いたものである。(図7は第一看護科, 図8は第二看護科の学生のエゴグラムを示す)。これよりみると, (+)の学生は第一看護科, 第二看護科ともに(NP) (FC)をピークにするM型を示し, 健康な女性のエゴグラムとほぼ一致している。(+)では, (CP) (FC)が高く, (NP)が低い。(+)では, (FC), (AC)が高く, 次いでNPが高いN型に近い型を示し, (--)では, 第一看護科では(A)を底とし, (FC) (AC)の高い谷型のエゴグラムを示し, 第二看護科では(A)よりごくわずかに(NP)の低い(FC), (AC)の高い谷型のエゴグラムを示している。(--)に共通する点は(NP), (A)が低く, (FC), (AC)にエネルギーが集中する傾

向である。

本校の看護科学生と, 杉田等¹⁵⁾の指摘する一般的傾向と比較すると, 看護科学生の(++)が(NP)をピークとする山型(Dusayのいうベル型)でなく, M型を示す点を除いては一般的傾向とほぼ一致しているといえる。

5) 看護学生のエゴグラム・OKグラムよりみたナースとして望ましい態度育成

基礎教育を受けている看護学生は, 同一化(あのナースのようになりたい)から同一性(私なりのナースでよい)に向かう時期であり, まだまだ人に依存したい, 甘えたい, 注目されたい, 先生に認めてもらいたいという要求が強い。そして, 患者さんが自分を気に入っているか, いないか, 好感を持ってくれているかどうか, 受け入れてくれたかどうかとかが重大であり, 自分中心の考えが主である。¹⁶⁾

今回の調査においても, 各学年ともにエゴグラムは, (C)の自我状態が高く, (P), (A)の自我状態が低く, 対人的関心の度合いも他者より自己にむく傾向がみられる。

人間対人間の仕事をプロフェッションの目標とすべき3大領域として, 認知領域と運動技能領域, 情意領域があげられる。認知領域では知識や知恵をみがくことであり, 運動技能領域では模倣から始まり, 自動化まで達する技能の達成であり, 情意領域では他人の苦しみ, 痛みのわかる受容, それに対して, 手をさしのべようとして態度にでる反応, 自分にいいかせなくても, 自然に反射的に行動に移すことのできる内在化のレベルに達することが目標である。¹⁷⁾

態度育成の教育は先天的な部分や, 幼いころからの家庭や, 今までの学校での教育に負うところが多く, 看護の基礎教育のなかで変えることは容易ではない。

新里等¹⁸⁾は, 看護学生に自己啓発トレーニングで低い自我が高められたと報告し, 学生個々の気づきを深める領域を指摘し, それを目的に参加したときに, そして, リーダーがそれに合致した技法を提供できたならば, 「成長=気づき」は促進され, その効果も持続すると述べ, 気づきの進化にともなって, 自己肯定の増加,

自己否定の減少をみたと報告している。

近藤¹⁹⁾は、ジレンマの事例（こちらをたてれば、あちらがたたず）を使った授業で、自分の情意領域の発達段階に気づくことが、さらに、上の段階に向かおうとする意欲をもつことにつながると述べ、情意領域においても、抽象的な目標ではなく、評価できる型で目標を具体化することが大切であると述べている。

4. まとめ

本学の看護科の学生は自我状態や基本的構えに、以下の特徴をもっていることがわかる。今後はこれらの現状をふまえて、ナースとしての望ましい態度の育成をはかる教育的工夫が必要であることが示唆される。

1) 子供から大人にかけて最も位置の変化の大きい自我機能は③であるが、第一看護科、第二看護科ともに③の自我機能が最も強く、思春期のエゴグラムに近い型を示す。

2) エゴグラムよりみると、①が最も低く、 $P < C$ 、 $NP > CP$ で、 FC 、 AC がともに高い。ピークエゴグラムも AC 、 FC がともに高く、③の自我機能で反応する傾向をもつ学生が全体の70%を占める。

3) OKグラムでは、他者より自己への関心が強く、 $++$ は30%で、そのうち、他者との関係で特に歪みの生じやすい他者否定傾向の学生が40%を占める。

4) YG性格検査とOKグラムの型との関連では、 $++$ は $---$ よりDタイプにでる出現の度合いは高く、 $---$ は積極、消極を問わず、不適応の類型（B、Eタイプ）を示す度合いが高い。

5) OKグラムの型とエゴグラムとの関連では、 $++$ はベル型を示さず、一般傾向と異なり、①の低いM型を示す。

$++$ 、 $+-$ 、 $---$ は一般的傾向と一致する。

謝 辞

稿を終えるにあたり、統計学的に多大なご援

助、ご指導をいただきました、本学医療秘書科、大森健三助教授に深謝いたします。

引用文献

- 1) 渋谷優子, 島村忠義, 村上美好, 西幸子: 日本の看護学生と教育像(その二). 第11回看護教育分科会, 22, (1980)
- 2) 白井幸子: 看護にいかす交流分析. 医学書院, 18, (1985)
- 3) John, M. Dusay, 新里里春訳: エゴグラム. 創元社, 174, (1980)
- 4) 池見西次郎, 杉田峰康: セルフ・コントロール. 創元社, 70~71, (1978)
- 5) 横山好治, 杉田峰康, 中村和子: 思春期のエゴグラムの研究. 交流分析, 5 (1), 5, (1980)
- 6) 杉田峰康, 新里里春, 和田迪子, 瀬川京子, 石川中: 新しいエゴグラム. チェックリスト (ECL) について. 交流分析, 4 (1), 32, (1977)
- 7) 杉田峰康, 水野正憲, 岡野一央博: エゴグラムと4つの基本的構え. 交流分析, 5 (2), 48, (1980)
- 8) 水野正憲: 自我状態と基本的構えを測定する質問紙 TAOK の作成. 第1回広島交流分析研究発表要旨, 20, (1980)
- 9) 同上. 23
- 10) 中村晶子, 坂本美奈子, 土生環, 村上弥砂代, 佳戴作: 女性におけるNP成績に関する研究. 交流分析, 10 (2), 53, (1985)
- 11) 水野正憲, 杉田峰康: OK エゴグラムによる自己理解. 交流分析, 9 (1・2), 39, (1984)
- 12) 中村晶子, 坂本美奈子, 土生環, 村上弥砂代, 佳戴作: 前掲書10). 54
- 13) 池見西次郎, 杉田峰康: 前掲書4). 86
- 14) 水野正憲, 杉田峰康, 新里里春, 岡野一央博: TOAKの信頼性・妥当性の研究. 交流分析, 7 (1), 44, (1982)
- 15) 杉田峰康, 水野正憲, 岡野一央博: 前掲書7), 47~48
- 16) 南裕子: 看護の感性を育むもの. 看護教育, 26 (1), 13, (1985)
- 17) 堀原一: 医療従事者の態度教育の必要性. 看護展望, 11 (10), 2-5, (1986)
- 18) 新里里春, 黒木尚子, 岡野一央博: 交流分析的自己開発経験の検討. 11 (1・2), 25~26 (1986)
- 19) 近藤潤子: 情意領域の評価方法の現状と課題. 看護展望11 (10), 13, (1986)

